

がいくせきけんみん かいぎ だい き ぶかいべつ ていげんそあん  
外国籍県民かながわ会議 (第12期) 部会別の提言素案

じょうほうぶかい  
【情報部会-①】

タイトル	<p>かながわけん がいくせきけんみん たい じょうほうていきょう かんりかいぜん 神奈川県HPの外国籍県民に対する情報提供の管理改善</p>
<p>ないよう 内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 県のホームページのトップページのコンテンツメニューに【外国籍県民へ】を追加する。</li> <li>• 外国籍県民向けに、やさしい日本語、または多言語で書かれている情報をカテゴリー（ライフシーン）ごとに検索できるページにする。</li> <li>• 既存の多言語情報リンク集を活用する（制度やサービスの変更時などに定期的な更新が必要）。</li> </ul>
<p>りゆう 理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 神奈川県HPの現況では外国籍県民にとって必要な情報が見つげづらいです。一方で横浜市HPではランディングページ（LP）で日本語が読めない人向けの分かりやすいリンクがあり、そのリンク先には数言語での情報が提供されています。</li> <li>• DX戦略を考慮するとLPがお店の窓のように綺麗に管理されていると、見ている人がお店に入ろうとする気持ちになる役割があります。</li> <li>• 神奈川県が多文化共生を推進していく上では、外国籍県民が情報を簡単に効率的に見つけられるように提供することも重要なことではないかと考えております。</li> <li>• 現況の神奈川県のHPはGoogleの自動翻訳サービスによる翻訳がされており理解しにくいところが数々あります。さらに、どんな情報がどこにあるかわかりにくく、必要な情報が探しにくいです。</li> </ul>
<p>びこう 備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 日本語が読めない人として、以下の双方のLPの使いやすさを比べてみてください。 <a href="https://www.pref.kanagawa.jp/">https://www.pref.kanagawa.jp/</a> <a href="https://www.city.yokohama.lg.jp/">https://www.city.yokohama.lg.jp/</a></li> <li>• 以下のような役に立つページはかなり見つけ難いです。このページを含めて外国籍県民に対するHP上の情報提供を管理改善してほしい。 <a href="https://www.pref.kanagawa.jp/osirase/1305/saponavi-kanagawa/">https://www.pref.kanagawa.jp/osirase/1305/saponavi-kanagawa/</a> <a href="https://www.pref.kanagawa.jp/menu/1/1/10/index.html">https://www.pref.kanagawa.jp/menu/1/1/10/index.html</a></li> </ul>

じょうほうぶかい  
【情報部会-②】

<p>タイトル</p>	<p>1. 外国籍県民かながわ会議の提言後の状況確認制度設立 2. 外国人の意見を確認できる制度設立</p>
<p>内容</p>	<p>1. 外国籍県民かながわ会議の提言後の状況を外国籍県民かながわ会議のメンバーが確認できる制度を設立する 2. 会議のメンバー以外の外国人の意見を確認して外国籍県民かながわ会議のメンバーが検討して多くの意見を提言に反映していく</p>
<p>理由</p>	<p>1. 現在外国籍県民かながわ会議にて提言後の状況がAやBで記載されているが、検討部署や検討内容や採用可能性があるのか、いつ採用するのか不採用になるのか明確ではないので、もう少し詳細内容を把握でき、常に外国籍県民かながわ会議のメンバーが確認できる制度を設立する。 2. 現在外国籍県民かながわ会議のメンバーになれば意見を県政に提言できるが、メンバーのみの意見だけではなく神奈川県<small>かながわけん</small>の外国人の意見を聞ける制度を作り、外国籍県民かながわ会議のメンバーが検討して良い意見は県政に提言できるように進めていくことで、幅広い外国人の意見が反映できる。</p>
<p>備考</p>	

<p><b>タイトル</b></p>	<p>しょうがくせい ちゅうがくせいむ にほんご きょうしつ 小学生、中学生向けの日本語のオンライン教室</p>
<p><b>内容</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>げんざい にほんごきょうしつ おとなむ にほんごきょうしつ おお にほん す ・現在の日本語教室は、大人向けの日本語教室が多いため、日本に住んでい る子どもたち向けをメインに進めたいと考えております。</li> <li>りょうしん ともぼたら にほんごきょうしつ かよ にほん がっこう かよ ・両親が共働きで、日本語教室に通いたくても通えず、日本の学校に通っ ている子どもたち向けにオンライン教室を設立する。</li> <li>にほん がっこう かよ こ おお がっこう ひら こくさいきょうしつ きんか ・日本の学校に通う子どもの多くは、学校で開かれる国際教室に参加してお り、その中には自宅に帰っても学びたい子どもたちがいるため、オンライン 教室でも、国際教室と同じ教わり方で学べれば、ベストです。</li> <li>また、おし せんせい けんしゅう う せんもんてき ちしき かた すす ・また、教える先生も、研修を受けて専門的な知識がある方を勧めます。そこ で、きょういくぶんや き りゅうがくせい かたがた しゅうしょくさき ふ 教育分野で来ている留学生の方々にも、就職先が増やせるチャンス とも思っております。</li> </ul>
<p><b>理由</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オンライン化することで、ちよくせつきょうしつ かよ こ がっこう ふつう ・オンライン化することで、直接教室に通えない子どもたちでも、学校の普通 の授業でわからなかったことを聞ける場を設けてあげたいと思えます。</li> <li>がっこう ひら がっこうきょうしつ ふつう じゅぎょう お こ ・学校で開かれる国際教室は、普通の授業だと追いつけない子どもたちのた めに、べつ きょうしつ こ じゅぎょう ・別の教室で、その子のペースで授業ができることです。</li> <li>きょうしつ こくさいきょうしつ へいこう おそ かた がっこう ・オンライン教室は、国際教室と並行した教え方がベストであり、やはり学校 で教わることがメインなので、子どもたちが混乱しないことが大切です。</li> <li>いぜん おそ こんらん たいせつ ・以前、コロナの時期にオンライン授業なども行われていたため、参加する ことはむずかしくないとおもいます。</li> <li>しょうがくせい ちゅうがくせいむ にほんご べんきょう ・また、小学生、中学生向けをメインにしているのは、そこで日本語の勉強、 じゅぎょう まな べんきょうほうほう つく おも 授業で学ぶ勉強方法のペースが作れると思うからです。</li> <li>せんせいがわ にほん おし かた おこな う たいせつ けんしゅう う せんもんてき ・先生側も日本の教え方で行うことが大切なので、研修などをうけて専門的 な知識を持たせることで、ちしき も かた おし がわ た どういう方でも教える側に立つことができるチャ ンスを作れると思えます。</li> </ul>
<p><b>備考</b></p>	

【次世代・教育部会①】

<p><b>タイトル</b></p>	<p>神奈川県立高等学校における国際理解クラブ活動を促進するモデル事業</p>
<p><b>内容</b></p>	<p><b>【目的】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グローバル社会を深く理解し一緒に「ともに生きる社会をつくる」人材育成のため神奈川県立高等学校の生徒を対象とした国際理解クラブ活動を促進するモデル事業を実施する。</li> </ul> <p><b>【背景】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多文化社会を迎え、学校教育現場でも、たくさんの外国につながる生徒が学校に通っている状況の中で、国際理解教育の重要性が高まっている</li> <li>外国籍県民など、特に若年層におけるポテンシャルを発見するため、地域社会で活躍できる場を必要とする</li> <li>外国籍県民、外国人コミュニティ、支援団体同士が互いに支え合う状況になっていない。横のつながりを作る必要がある</li> </ul> <p><b>【企画概要】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>場所：神奈川県立高等学校</li> <li>対象：高校生</li> <li>内容：国際理解、多文化共生、日本語教育、母語(継承語)・母文化教育など、外国人コミュニティや外国籍県民などが活躍できる場づくりにもつながる</li> </ul> <p><b>【計画・方向性】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>短期的：教育委員会、神奈川県内の外国につながる生徒が多い(見込みを含む)高等学校に打診し、国際理解クラブのあり方について検討する</li> <li>↓</li> <li>中期的：国際理解クラブを実際に運営し、モデル事業として実績を出す</li> <li>↓</li> <li>長期的：神奈川県内における高等学校に情報共有し、ノウハウを広げる</li> </ul> <p><b>【予想される課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本提案を受け入れ可能な県立高等学校の実態</li> <li>国際理解クラブ運営に必要な財源</li> <li>制度の継続性を考え、神奈川県国際課と教育委員会の連携を図る</li> </ul>
<p><b>理由</b></p>	
<p><b>備考</b></p>	

タイトル	外国人保護者と子どものための教育支援
<p>ないよう 内容</p>	<p>さまざまな理由で来日し日本に定住する外国人の日本語支援やサポートが整えられているが、未だサポートがボランティアに頼られていること。問題の核心に達していない支援の実態を調査し、定住外国人と長く共生していくためのプロセスを設計し、発達障害と分類される外国人児童・生徒の実態調査及び支援の結果を共有する。</p> <p>(1) この頃、支援学級へ通う外国につながるの児童・生徒のことが話題になっている。日本語支援が必要で元の学級での学習が難しく支援学級に行くことになった場合、その後、児童・生徒の進級状況を保護者や支援者・関係者に報告する。</p> <p>(2) 日本国籍を持つ外国につながる子どもは名前や見た目、生活言語の熟度、日本国籍所持から支援対象から外れがちであることを考慮し、子どもの背景の調査を関係者で共有する。</p> <p>県が出している支援者向けの資料に外国につながる子どもが支援学級に入れられている現状、その背景に日本語や母語支援の問題があることなどを盛り込むことで、支援がより確実になってくる。</p> <p>&lt;参考&gt;</p> <p><a href="https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4b/cnt/f984/p1213511.html">https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4b/cnt/f984/p1213511.html</a></p> <p><a href="https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/kenkyu/shienkyouiku.html">https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/kenkyu/shienkyouiku.html</a></p> <p>県がまとめた発達障害児の保護者向けのサイトは以下のものがあって大変分かりやすい。外国につながるの児童・生徒が日本語支援が足りているのか、専門家により発達障害と診断されたのか実態調査と追跡が必要である。支援学級へ行かされた児童・生徒が発達障害であるなら専門家の意見書を保護者に提出することを義務付ける。</p> <p>&lt;参考&gt;</p> <p><a href="https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4b/cnt/f984/p1213511.html">https://www.pref.kanagawa.jp/docs/a4b/cnt/f984/p1213511.html</a></p>

<p>理由</p>	<p>学校は閉鎖的で今日、なにかにつけ「個人情報保護」だなど必要以上に問題を抱え込む傾向が強くなった。「個人情報保護」の言葉に隠れて横のつながりを薄くし、支援者同士も関係性を持たないまま、教員たちは児童・生徒を抱え込んで支援学級へ送り込む。</p> <p>このような悪循環を断ち切るためにも実態調査をすること、調査の結果を共有し、さらなる支援へつなぐことを切実に願う次第である。</p> <p>横のつながりを持つことで日本語支援が充実になり支援を必要とする本人の状況が見えやすくなる点を活かすこと。母語（継承語）の支援を充実することで、家庭内言語を確立すること。このことは介護政策にもつながることで、保護者世代の介護ニーズが家庭内でくみ取れるようになるだろう。</p> <p>児童・生徒は日本語支援を受けて日本社会の一員として成長していくが、家庭内に取り残された保護者は日本語がままならないまま介護期を迎え、介護支援に辿りつけないケースが生じるようになる。</p> <p>このようなことから母語（継承語）支援を強化し、自分のルーツをしっかりと認識して生きる人に成長できるよう支援することが大切である。</p>
<p>備考</p>	

<p><b>タイトル</b></p>	<p>がいくじん こうれいか む あ しえん 外国人の高齢化に向き合う支援</p>
<p><b>内容</b></p>	<p>(1) がいこくじんかいごし せいどどうにゆう 外国人介護士コーディネーター制度導入 がいくじんかいごろうどうしや とうろく ひつよう おう じぶん げんご い ひつよう 外国人介護労働者が登録し、必要に応じて自分の言語を活かせる（必要とする） かいごしせつ で む じゅうなん たいおう 介護施設に出向き、柔軟なサービスに対応できるようなシステムをつくる。 がいくじんかいごろうどうしや そうだん ば もう 外国人介護労働者が相談できる場を設ける。</p> <p>かしょう がいくじんかいご たぶんか 仮称：「外国人介護HUBステーション」もしくは「多文化ケアマネージャーセンター」</p> <p>(2) がいこくじんこうれいしや つど ぼ 外国人高齢者の集いの場づくり しえん けつえん うす げんだい こくせき と こうれいしや しえん ひつよう 地縁・社縁・血縁が薄れてきた現代、国籍を問わず高齢者の支援は必要である。 このような社会情勢の中での外国人高齢者は言葉の壁を持っており、その弊害は本人の努力でも解決に追いつかない場合が多い。そこで社会が場を提供し外国人高齢者が孤立しないようにすることが必要である。</p>
<p><b>理由</b></p>	<p>これまで日本政府は外国人を使い捨ての労働力と見ていた節があり、 ろうどうりよく い つごう よく き おも 労働力が要らなくなったら都合よく去ってくれると思っていた。 しかしニューカマーも高齢化してきた。外国人の老後問題が日本人の高齢化問題のように社会問題として認識されていないことから、外国人の高齢化に目を向け、介護難民を作らない政策で、日本で安心して死ねるようなプロセスを設計し、彼らの教育、医療、社会保障まで形成してもらふ必要がある。</p> <p>あいちけん ぜんこく はじ がいくじんこうれいしや かん じつたいちようさき ほうこくしよ 愛知県では全国で初めて外国人高齢者に関する実態調査をし報告書にまとめています。</p> <p>なか こんご かだい ぎようせいとう ようぼう いか てん あ その中で今後の課題・行政等への要望として以下の点を挙げています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 書類の多言語化や、依頼に応じて通訳を派遣できるシステムの構築が必要</li> <li>• 母語ができるケアマネジャーの養成や、在住外国人が資格を取りやすい仕組みが必要</li> <li>• 外国人高齢者が周囲に遠慮することなく、母語や母国文化の中で日々の生活を送ることができる居場所づくりが必要</li> <li>• 分野の異なる様々な主体が連携して、外国人に対する介護ネットワークを形成して解決ができるような仕組みが必要</li> </ul> <p>さんこう あいちけん とりくみ &lt;参考&gt;愛知県の取組 <a href="https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokujinkoureisya-chousa.html">https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokujinkoureisya-chousa.html</a></p>
<p><b>備考</b></p>	

しゃかいふくしぶかい  
【社会福祉部会-③】

<p><b>タイトル</b></p>	<p>通訳ボランティアのための支援 ～ ボランティアが保護され、力を伸ばせられる施策の必要性 ～</p>
<p><b>内容</b></p>	<p>(1) 通訳ボランティア団体が実施する研修会で、心理カウンセリングなどの研修を追加する。</p> <p>(2) 神奈川県外国人専用相談窓口の時間外に人工知能Chat GPT (チャット GPT) などの AI を設置し、外国人からの電話相談に人工知能の音声で答えられるようにする。</p> <p>(3) 日本語支援や母語話者支援を続けるために、その人材に妥当な報酬を支払う。そのことで専門性が高まり、責任や自覚が培われ、ウィンウィンの状況を作り、母語話者の成長につながる。 次世代が自分のアイデンティティを確立するための土台となるだろう。</p>
<p><b>理由</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>通訳者と依頼者が病院の待合室で過ごす時間、通訳時、通訳後に上手く意思疎通ができるように通訳ボランティアの心理カウンセリングが必要だ。医師や医療関係者との問題や喧嘩を未然に防ぐためには、通訳ボランティアの医療の専門知識だけでは足りないのが現状だ。</li> <li>現在の支援者はボランティア扱いで報酬は「謝礼」に留まり、1990年代に設定された料金、支援活動2時間で5000円、通訳一回で3000円が相場のようなのだ。このことにより人材が育成できないし、教育や支援に携わる人材が横流れしてしまうのが現状である。</li> <li>2時間の支援のために行き来の時間、交通費などの経費が払われておらず実際半日を費やして5000円の報酬では神奈川県最低賃金にも達しない。通訳に関しても同様で、実際の通訳時間15分ないし20分と言っても行き来の時間、待合せの時間、せつかく母語話者に会えた依頼者は時間を過ぎても話をしたい場合が多い。「通訳のルール」などを用いても現実的に実効性のないルールである。20分の通訳の時間だけを計算して謝礼するのではとても割に合わない。しかも珍しい言語となると通訳者の必要性はより高まり、県南から北へと移動を余儀なくされる。報酬の見直しが必要である。</li> </ul> <p>ボランティアの必要性、ボランティアとして社会にかかわりを持つ意味など、需要と供給は社会の礎となる。ボランティア精神がフェイドアウトしないように、ボランティア活動が心的負担にならないように常に見直しと制度の構築が必要である。</p>
<p><b>備考</b></p>	